

Reports

第34回こころの講演会

『医療や福祉にとどまらないひきこもり支援 ～子どもから8050まで 精神科訪問看護の実践～』 「機が熟す」まで準備して待つ

第34回こころの講演会が6月14日(土)に奈良女子大学でありました。

「医療や福祉にとどまらないひきこもり支援～子どもから8050まで 精神科訪問看護の実践～」と題し、みつや訪問看護ステーション(医療法人三家(みつや)クリニック)の作業療法士、関晋太郎さん、吉田櫻さんにご講演いただきました。大雨の中でしたが、福祉や看護分野の専門職、障がいのある人、家族など55人が参加しました。

【ひきこもる要因は?】

ひきこもりとは、様々な要因の結果として社会的参加を回避していたり、原則6か月以上にわたり家庭にとどまり続けている状態をいう。全国で146万人(2016年内閣府調査)と推計されている。

高校入学時の総数を100人とする、在学中、進学、就職など様々なタイミングで所属先を失う、または行けなくなる人は60人に上るという研究もある。ひきこもる要因は不登校、いじめ、障がい、精神疾患、その重複など様々。精神疾患のない人もいるが、精神疾患の人が多い。

みつや訪問看護ステーションの最近の特徴は、小学生～20代の患者さんの増加。コロナ禍を経て人との関わりが少なくなり、本音で人と付き合う経験が希薄になった影響もある。

【治療の場は住み慣れた家】

「三家クリニック」は、大阪府寝屋川市で1981年に開業。創設者の三家英明院長は「住み慣れた生活の場が治療の場である」を理念に、開院時から通院できない人には当たり前往診を行ってきた。

往診という生活の場での時間をかけた関わりの中で、本人や家族の不安が軽減され病状も安定していくという経験が多数あった。また、コメディカルスタッフが訪問して必要な支援の提供したり、地域の資源と連携することで生活を支える流れができ、アウトリーチ支援に積極的に取り組めるようになった。

【支援者に求められること】

「本人が来なければ診られません」と言われ、医療につながるまでに何年もかかってしまった人もいる。本人の様子を家族以外に知ってもらう機会がない、調子の悪い時には病院に行けない、どうやって医療機関に連れて行けばよいのかわからない。支援が必要な人ほど支援を受けづらい状況にある。

◇支援者に求められること

- ・人生が前向きに変化するきっかけの提供
- ・様々な生きづらさを抱えた人たちを理解しようとする姿勢
- ・思慮深く洞察し準備は怠らないが、楽観的な気分で。チームのいろんなキャラクターで補い合う
- ・孤立していることの多い家族へのサポート
- ・すぐに解決しそうでないことを一緒に考えていく姿勢

【気持ちの変化を逃さず】

みつや訪問看護ステーションや寝屋川市の取り組みを聞くだけでなく、奈良県でのひきこもり支援の状況や参加者それぞれの思いを共有するため、質疑応答の時間を1時間と長めに設定しましたが、時間いっぱいまで様々な質問や意見が出ました。

子ども関係の支援者からの「受診を提案しても親が拒否的なときの受診へのつなげ方」については、「予約すること自体が不安という親もいる。そこへのサポートがあればできるのかもしれないし、なぜ拒否的になっているのかの前提を探る。『親が楽になるために、子の支援者を増やしましょう』などの目的の伝え方も一つ」との提案がありました。

また、「ひきこもっていて人からの関わりに抵抗がある人にどう関わっていくか?」という質問に対しては、「定期的に会う、周りの環境を少しずつ変えてみる、などしながら、本人の気持ちの変化するタイミングが来たときに集中して関わられるように準備しておく。機が熟すまで待つ、ということも大事」との話がありました。

高齢者の支援者からの「同居家族が引きこもっている場合、どう関わったらいいのか?」との質問には、「親に何かあってからでないと動けないケースはたくさんある。行き詰まったところに入っていくといけませんが、『できる限りやります』という姿勢で関わる。『人はつながりを求めている生き物』と信じて関わる」ということでした。(六十谷尚美)